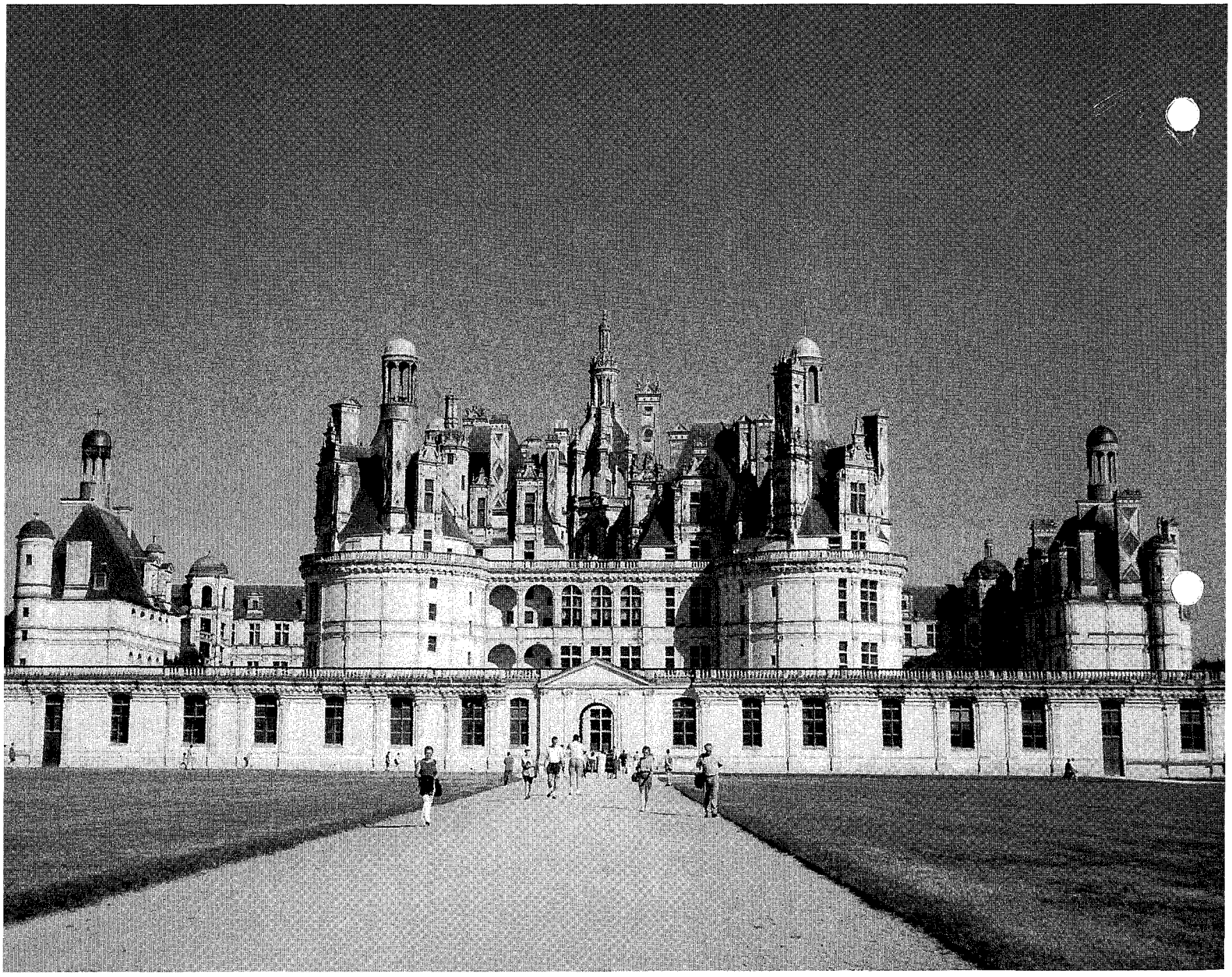
[TAKUSUI] [TAKUSUI] [TAKUSUI] [TAKUSUI] [TAKUSUI]

拓水

11
NOVEMBER
1996



特集　インドネシア旅行見聞録（上）
〔バリ島編そのⅠ〕　No.481

季節の香（かおり）

【モミジ／紅葉】

秋の深まりと共に、北から紅葉前線が一気に駆け下りて、多様な色合いの一大絵巻を披露する。「渓谷の流れに散り浮く紅葉…山の上にも織る錦」と唱歌で覚えたのはいつだったか。龍田姫が織りあげたとの伝説は、古い信仰から生まれているという。

秋の日暮れは早い。美しさに見惚れていると、辺りは直ぐ暗くなってしまう。対岸の黄葉に名残りの陽があたり、黄金色が浮き立つ。日本にはモミジの仲間が二十数種も分布し、世界でも比類ない紅葉の国といわれる。園芸品も独自に発達して、その数は二百を超えている。

間もなく木枯らしの季節。美しい錦の衣装も風に飛ばされ、モミジに静かな眠りが訪れる。生命の消えて行く前のホンのひとときを、こんなにも華麗な姿で季節の移りを謳歌している。

COLUMN

良薬は口に苦し

◆医者にいくと薬をヤマとくれたと年寄りがいう。老化による衰えには、特効薬はないからビタミン剤の類いだろうが完全な薬漬けではある。それを嫌って自分で判断して売薬で済ませているらしいが、素人判断ほど怖いものはない。薬とは、ある種の分子が集合したものである。分子を構成する原子が、どの原子と結びつくかで薬の個性が生まれる。身体に入った薬が目的とする治療に役立つかどうか、副作用はどうかが薬品開発のキーポイントになる。その副作用による弊害の安全度に新しいクスリ誕生の合否が懸かっている。

◆薬を必要とする患部にだけ充分に送り込み、なるべく副作用が無いことが望ましいが、効き目の良い薬ほど弊害も大きいのが普通である。カゼ薬を飲むと眠くなるのは副作用だという。冬が近づくと風邪薬の宣伝合戦が始まるが、カゼ発症の原因であるウィルス菌撃退の特効薬は未だ発見されていないから、症状緩和のための総合カゼ薬などという名称のものである。少しは快適へと導いてくれるが、根本的に治療を目指すものではない。飲んだあとでは車の運転は控えることだと注意書きにある。

◆薬を飲む時間に食後三十分というのが多いが、飲み忘れ防止の苦肉の策である。いくら忘れっぽくても食事を忘れることはあるまい。薬の効力は薬品の濃度を一定に保つことで高められるのだから、決められた時間に服用するのが肝要である。「クスリ漬け」だと悪評高い今の医療でも必要ならば、キッチリと時間厳守で飲むのが回復への早道である。

◆「良薬は口に苦し」というが、今では糖衣錠やカプセル入りが殆どだから、この言葉もオモテの意味では色褪せた感じになっている。嫌がる子供を宥めつつ、薬を包みこんだオブラートも既に死語に近い。

（遊方子）

拓水 NOVEMBER CONTENTS

季節の香 2
モミジ／紅葉

COLUMN 3
良薬は口に苦し

TOPICS 4
東由良町漁協婦人部初優勝！
第13回淡路地区漁婦連バレーボール大会
平成８年度兵庫県漁協婦人部
ブロック講習会（播磨地区）を開催
平成８年度兵庫県漁婦連幹部研修会

特　集 6
インドネシア旅行見聞録(上)
〔バリ編そのＩ〕

水試ノート 12
マアナゴの資源管理について

栽培漁業センターです 13
普及員だより
ノリの色彩について

漁海況情報 14
海区漁業調整だより

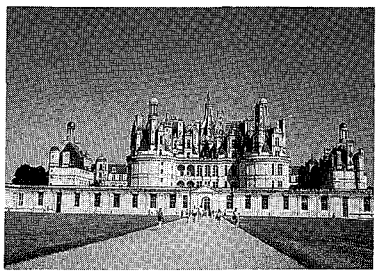
旬の美味い話 15
ＵＦＯフィッシュ

兵庫ＪＣＣ通信
体験学習の成果実る
～神戸の小学生が稲刈り～
「地震災害等に対する国民的保障制度を求める」
署名運動「全国・兵庫県推進大会」を開催

こちら海ですロケだより
こち海20年!!
思い出のあの歌　あのシーン
～淡路島・但馬各地より～

今月の表紙

フォトギャラリー



表紙写真
西沢　範子さん
＜県漁連＞

フォト歳時記

シャンボール城（パリ郊外にて）

四隅に円い塔のある主館を、ほぼ正方形に低い建物が取り囲み、整然と区画されている。古典古代を再生させたルネサンス建築のシャンボール城。

美しい初期ルネサンス様式が、この城で見られる。林立する小さな塔、半月アーチの飾りに縦長の窓。ここだけが中世の時代に取り残され、時間が停っているようだ。あまりにも古典的な…

雲ひとつない青天井の下に、孤立する武備のない宮殿。フランソア一世の狩猟の館（やかた）だったという。古き良き時代の巨大な遺産。フランスへの旅の一コマ。

＜表紙写真募集＞

アマチュアの方で、ご自慢の写真がございましたら、左のように明記して、お送り下さい。写真は必ずご返却いたします。①写真撮影場所②氏名（フリガナ）③郵便番号・住所④自宅電話番号（市外局番号も）⑤年齢・職業

送り先

〒六五二　神戸市兵庫区中之島二丁目二―一　県立水産会館
兵庫県漁業協同組合連合会
指導部指導課「拓水」係宛

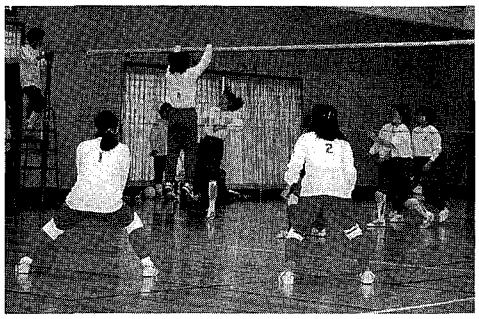
TOPICS

東由良町漁協婦人部初優勝！ 第13回淡路地区漁婦連バレーボール大会

十三回目を迎えた淡路地区漁協婦人部連合会親睦バレーボール大会が、去る十月十二日(土)に淡路勤労センターで開催されました。部員相互の親睦と健康維持をはかることを目的としている当大会に、今年は淡路各地より十二チームが参加しました。

開催にあたり、淡路地区漁婦連、森会長が挨拶、続いて来賓の方々を代表して㈱淡路水交会・鯛会長、兵庫県漁連・上田淡路支所長よりご挨拶をいただきました。

続いて前年度優勝チームの福良漁協婦人部より優勝杯の返還、淡路町漁協婦人部の山田三恵子さんが選手宣誓を行い、熱戦の火ぶたがきられました。



競技は、A・Bブロックに分かれ変則リーグ方式(三セット目は、ラリー制)で予選を行い、その結果上位六チームが準々決勝へと駒を進め、トーナメント方式で優勝を目指して対戦しました。

今大会は、沼島漁協婦人部より〝沼島の春〟でおなじみの新妻の方が出場するなど、選手層も若返り華やかな大会になりました。

コートでは主人や子供達の声援のもと、各試合とも好プレー(珍プレー)が続出、早朝から接戦の連続で熱い試合が続きました。しかし、中には、日頃の成果が発揮できないまま敗退し悔し涙をのんだチームや、満足いくプレーで笑顔を残し去っていったチーム等があり、次回が期待できる大会になりました。

尚、試合の結果は、両エースの頑張りと堅い守りで東由良町Bチームが初優勝を飾りました。結果は、次の通りです。

Aブロック

試合	第1試合	第2試合	第3試合
対戦チーム	丸山A 15-3 15-8 淡路町B	東由良町A 13-15 12-15 南淡	沼島A 15-9 15-8 仮屋
審判	仮屋	丸山A	南淡

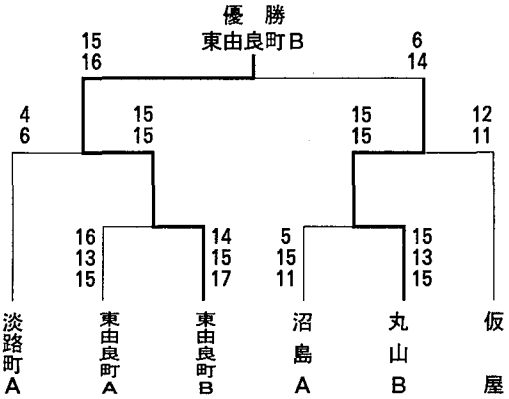
試合	第4試合	第5試合	第6試合
対戦チーム	東由良町A 15-12 15-12 丸山A	淡路町B 15-12 15-12 仮屋	沼島A 15-12 15-12 南淡
審判	沼島A	丸山A	淡路町B

優勝	東由良町B
準優勝	丸山B
3位	仮屋
4位	淡路町A

3位決定戦

仮屋 15－8 15－5 淡路町A

決勝トーナメント



Bブロック

試合	第1試合	第2試合	第3試合
対戦チーム	東由良町B 2-15 4-15 森	湊 5-15 10-15 淡路町A	丸山B 15-10 15-8 沼島B
審判	丸山B	森	淡路町A

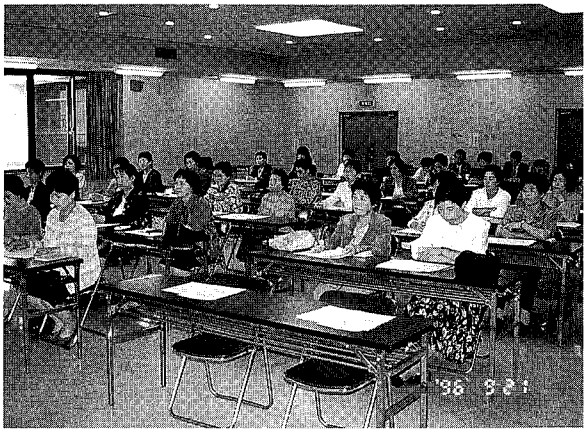
試合	第4試合	第5試合	第6試合
対戦チーム	湊 2-15 4-15 森	東由良町B 5-15 10-15 丸山B	淡路町A 15-10 15-8 沼島B
審判	沼島B	湊	東由良町B

平成8年度 兵庫県漁協婦人部ブロック講習会（播磨地区）を開催

去る九月二十一日、播磨漁友会館において県漁婦連主催による平成八年度兵庫県漁協婦人部ブロック講習会（播磨地区）が、四十九名参加のもと開催されました。この講習会は県下の漁協婦人部活動の活性化を図るため、毎年、各地区毎に開催されているもので、本年度は、まず統一テーマとしては兵庫県信用漁業協同組合連合会専務理事の天野栄蔵氏に「これからの漁協系統信用事業について」と題してご講演していただきました。講演では、今後、漁協系統信用事業がより大きなサービスを提供していくための漁協の信用部門と信漁連の統合について、そのメリットと取組み方法についてご講話していただきました。

また、地区テーマとしては、お魚普及講師の百済一夫氏に「おさかなと健康」と題してご講演していただきました。講演では、まず、現代人の食生活が、若い人達を中心に欧米型に移行していることで、栄養のバランスがとれていた日本型食生活が薄れてきている。これに伴い食事の偏りが様々な成人病を引き起こしているが、魚にはそれらを予防する栄養が多く含まれており、今、魚食が見直されつつある。そこで魚に含まれている栄養がどのようなもので、どの魚がどんな病気（症状）に効果があるのか、また、魚の雑学をクイズ形式で紹介していただくなど、魚について幅広くお話していただきました。

漁協婦人部員がこの講習で学んだことを今後の生活や料理教室等に生かされることを期待してやみません。



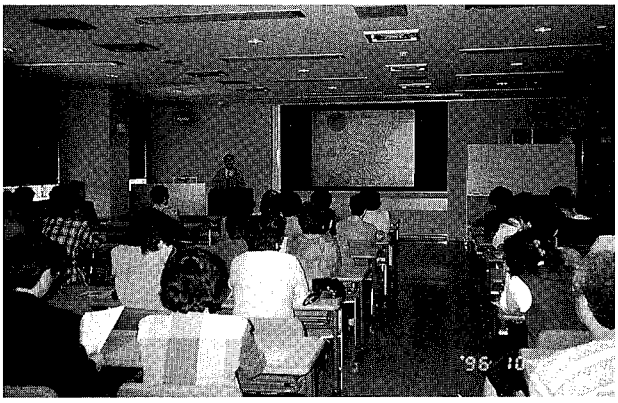
平成8年度 兵庫県漁婦連 幹部研修会 ～滋賀県・水環境科学館を訪れて～

秋晴れのもと、去る十月二十三・二十四日の二日間、県下の漁協婦人部員三十九名参加による「兵庫県漁婦連幹部研修会」が行われました。

これは、漁協婦人部幹部としての自覚と教養をたかめ、さらに漁協婦人部員相互の交流を図ることによって、今後の婦人部活動に寄与することを目的に、毎年行われている視察研修であり、今回は滋賀県草津市にある「水環境科学館」を訪れ、水とわたしたちの生活のかかわりについて学びました。

上水道が整備され、蛇口をひねるだけできれいな水が手に入るようになり、便利で、衛生的で、近代的な生活が送れるようになった今日、私たちは水源に関心をもたなくなり、今まで大切にしていた川や湖に排水を流すようになりました。そんな中、生活雑排水を下水道で浄化することが進められており、今、各家庭においても何らかの対策が必要ではないかと、改めて考えさせられました。

また、NHK大河ドラマ「秀吉」の放映にあわせ、四月より開催されている『北近江秀吉博覧会』及び、十月二十日開館されたばかりの『県立琵琶湖博物館』を見学しました。



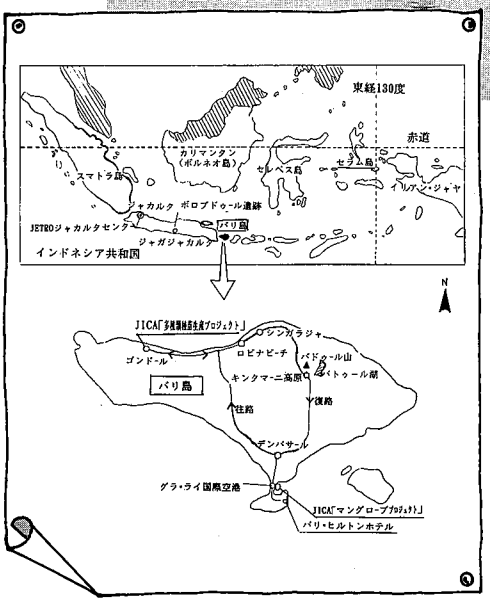
水環境科学館（研修風景）

こうして二日間に及ぶ視察研修を無事終えた訳ですが、今回参加された漁協婦人部幹部の皆様方はもとより、他の婦人部員の方々におかれましても、今後とも漁協婦人部活動を通じて、活力ある漁業・漁村づくりに邁進されますようご期待申し上げます。

水環境科学館ホールにて

特集 インドネシア旅行見聞録（上）〔バリ編その1〕

財団法人 兵庫県水産振興基金



平成八年度「国際交流事業」として、九月一日から七日までの七日間にわたり、当基金の山田副理事長を団長とする総勢二十八名の視察団がインドネシアのバリ島、ジャワ島を視察した。

その視察内容を報告するとともに、これからインドネシアへ旅行する方々の参考になると思われるよもやま話も紹介する。

今回の視察は、県漁青連の役員及び漁協の中堅職員を中心としたメンバーで実施し、バリ島においては、国際協力事業団（JICA）の二つのプロジェクトを視察し「日本の国際協力の現状」並びに「開発と環境の調和」について研修し、また、ジャワ島においては日本貿易振興会（JETRO）のジャカルタセンターを訪問し「インドネシアの概要と水産業の今後の展開」について研修した。

また、バリ島中北部の景勝地「キンタマーニ高原」、ジャワ島中部にある世界最大の仏教遺跡「ボロブドゥール」などの観光地も見学し、インドネシアの文化と歴史に対する見聞を深めた。

参加者の所属及び氏名（敬称略）

所属	氏名
神戸市漁業協同組合	山田 春三（団長）
神戸市漁協水産研究会	前田 勝彦
岩見漁協友水会	神頭 正志
〃	井上 純夫
室津漁協青年部	吉村 昌明
〃	本多 伸弘
東由良町漁協青年部	川野 亮一
炬口漁協青年部	成瀬 知和
〃	竹岡 千尋
浅野健水会	高木 秀文
〃	西尾 和洋
丸山漁協4Hクラブ	杉田 誠
阿那賀漁協4Hクラブ	堀 嘉伸
津居山港漁協青壮年部	木下 拓治
神戸市漁業協同組合	河本 勝博
〃	田中 利樹
林崎漁業協同組合	鷲尾 圭司
家島漁業協同組合	寺田 良
東由良町漁業協同組合	廣瀬 孝
〃	島崎 裕之
森漁業協同組合	海川 充正
一宮町漁業協同組合	地鼻 嘉文
丸山漁業協同組合	谷 喜美
兵庫県栽培漁業協会	根本 拓史
兵庫県水産振興基金	満尾 伸洋
〃	三木 宗和
〃	吉和 恭子
兵庫県水産公害対策基金	榎並 晴広

それでは、前置きはこれぐらいにして、日程の順を追って話を始めさせていただく。堅苦しい話もあるがご辛抱のほどよろしくお願いしたい。

なお、今月号では「バリ編その1」を、来月号では「バリ編その2」「ジャワ編」を紹介する。

◆いざ、バリ島へ

九月一日午前十時、関西国際空港国際

インドネシア漁業視察交流日程表

月日	場所	行事等
9月1日(日)	関西国際空港 バリ島	・午前10時集合 日本アジア航空直行便にてバリ島のデンパサールに ・入国手続後バリ・ヒルトンホテルへ
9月2日(月)	バリ島	・ゴンドールのJICA「多種類種苗生産技術開発計画プロジェクト」視察 ・ロビナビーチにてJICAメンバーと夕食会
9月3日(火)	バリ島	・ロビナビーチからキンタマーニ高原を経由してバリ・ヒルトンホテルへ
9月4日(水)	バリ島	・デンパサールのJICA「マングローブ林資源保全開発現地調査プロジェクト」視察 ・バリ・ヒルトンホテルにてJICAメンバーと昼食会
9月5日(木)	バリ島 ジャワ島	・国内線にて、ジャワ島中部のジョグジャカルタへ ・世界最大の仏教遺跡「ボロブドゥール」見学後、国内線にてジャカルタへ
9月6日(金)	ジャワ島	・JETROジャカルタ事務所訪問 ・日本アジア航空直行便にて関西国際空港へ
9月7日(土)	関西国際空港	・午前六時着解散

線出発ロビーに全員集合（若干二名が遅刻）。空港内の会議室で添乗員から出国手続きなどの説明を受け、免税店で酒やタバコを買い、十二時十分、日本アジア航空のダグラスDC10は一路バリ島を目指し関空を飛び立った。

このたびの旅行は、赤道直下の国への旅であり、身軽な服装で手荷物も少なくなるように、スーツ、ネクタイは不要ということにしたが（説明が不十分でスーツをわざわざ持ってこられた方、ごめんなさい）水のペットボトルをスーツケースにたくさん詰めて来られた方もおられたようで、ご苦労様でした。話が脱線しました。

さて、夏休みが終って空席があってもいいはずなのに、飛行機は満席状態で、バリのグラ・ライ国際空港までの六時間三十分少々窮屈な思いをした。関空からバリへは、日本アジア航空が木曜日を除く毎日、ガルーダ・インドネシア航空が週三日就航しているのに満席とは…暇と金を持て余している人（日本人）の何と多いことか。

◆バリで最初の夜を迎える

バリ島南部のデンパサール（バリ州の首都）にあるグラ・ライ国際空港に午後五時四十分無事到着（時差は一時間マイナス）。現地旅行会社ラマ・ツアーズのガイド、メルタ・ジャヤさん（残念ながら男でした）の出迎えを受けた。

無事バリに到着し、やれやれという思いで、ジャヤさんの後を、バス乗り場まで、スーツケースを引きずって歩き始めると、空港のロビーにたむろしていた男どもがどっと押し寄せ、我々一行の荷物を取り上げ運ぼうとするではないか。その強引さに負けて、荷物から手を離したら最後、わずか数メートルを運んだだけで、五百円、千円のチップを要求される。何が何だか訳のわからないままにチップを支払った方がおられたようだ。これからバリへ行かれる方は、荷物はしっかりと持ちましょう。バリでは、千円というお金は大変価値のあるお金です。

我々一行を乗せたバスは、夕暮れの道を南下し、バドゥン半島にある宿泊地のヌサ・ドゥアに向かった。およそ二十分でヌサ・ドゥア地区の入口に向かい合わせに建っている高さが十メートルを超えるような石造りの割れ門（この割れ門は、バリ島の各集落の入口に設けられており、魔よけの意味があるらしい）を通過し、バリ・ヒルトンホテルに到着した。

バリ・ヒルトンホテル

ヌサ・ドゥア地区は、最近開発されたリゾート地区で、バリ島の中でも隔離された地区のようであった。

海外旅行では飲み水に不便を感じられた方が多いと思うが、特に、東南アジアでは、コレラという恐ろしい病気もあり、不安を持っていたが、ホテルの各部屋には、飲料水があり、ほっと一安心した次第である。

その日の夕食は、ホテルのレストランで、インドネシアのビール（ビンタンビールといいあまり苦みはない。日本のビールもあるが料金は高い。外国旅行では、その国のお酒を飲みましょう。）を飲み、フランス料理をいただいた。メンバーの中には、生バンドの演奏で、歌を歌った元気者もおり、ワイワイ騒いでいるうちに、バリ島、最初の夜は更けていった。

◆バリ島を縦断する

九月二日午前七時四十分、ホテルを出発し、国際協力事業団の「多種類種苗生産技術開発プロジェクト」を視察するため、バリ島北西部のゴンドールへ向かった。バリ島は東西約百五十キロ、南北約九十キロの西洋ナシを横にしたような島である。

ここで、バリ島で我々のお世話をしていただいたガイドのジャヤさんを紹介しておく。ジャヤさんは、バリ島出身の見るからに温厚な中年のおじさんで、ジャヤさんの働いているラマ・ツアーズ社は、二百名以上の社員がいるバリ島で最大手の旅行会社である。

社長は福岡出身の日本人女性で、一九七八年にインドネシア人の旦那さんと会社を設立したということである。そのせいか、ジャヤさんは、日本語が堪能であるばかりでなく、日本のことについても非常に詳しい（インドネシアのことについて詳しいのは勿論のことである）。一番驚いたことは、ジャヤさんが、旅行の道中にすれ違う日本の自動車の年式を次々に言うことである。当たっているのかどうか、我々には判断できなかったが、当たっているとしたら驚異である。なにしろ古いものでは二十年以上も前の年式を言うのである。

インドネシアでは、自動車が高価（カローラクラスの新車が三百万円ほどし、所得水準からすると、とんでもない値段である）なため自動車を持つということは憧れらしいが、それにしても、恐れ入った。

参考までに、バリの物価を紹介しておく。牛肉五百五十円（一キロ）、豚肉三百五十円（一キロ）、米十九円（一キロ）、ガソリン三十五円（一リッター）…といった具合であり、日本と比べると生活必需品は驚くほど安く、贅沢品はめっぽう高い。四人家族の農家で食料を自給自足すれば、月に四千円あれば生活ができるということである。このように、バリでは千円は大変価値のあるお金なのである。

さて、名ガイドのジャヤさんの案内を聞いているうちに、三菱のターボエンジンを積んだバスは、バリ島南部の町をいくつか通り抜け、観光ルートからは完全

にはずれた山道を、ゴンドールを目指して走った。道路は、ガタガタ道を想像していたが、市街地はもちろん山道まで舗装（簡易舗装）がされていた。車窓からは段々畑のような田んぼや椰子の樹海といった南国の風景を満喫できた。

バリでは自動車は、それほど多くはなかったが、単車が驚くほど多く、震災直後の神戸のように、我がもの顔で走り回っていた。単車の定員は大人二名と子供二名まではいいそうで、ミニバイククラスの単車に親子四名が乗っている姿には感動した。日本の暴走族以上である。

ホテルを出発し、三時間三十分で、バリ北部のロビナビーチに到着した。このビーチにあるパルマビーチホテル（その日の宿泊場所）で昼食と休憩を取った後、海岸線沿いに西へ西へと一時間走り、ようやく目的地ゴンドールに到着した。

◆国際協力事業団「多種類種苗生産技術開発プロジェクト」を視察する

プロジェクトの視察内容について報告する前に、国際協力事業団について若干説明をさせていただく。

国際協力事業団は、日本政府の政府開発援助（ＯＤＡ）のうち、二国間贈与（日本政府と開発途上国政府との直接合意による無償援助）としての技術協力を行っている機関で、その援助には、農林水産業、鉱工業などの産業分野への援助と教育、医療、天災時の緊急援助などの人道的援助がある。

ＪＩＣＡ「多種類種苗生産技術開発プロジェクト」
正面左　望月リーダー　右スガマ所長

技術協力の方法として、専門家の派遣、研修員の受入れ、機材供与、青年海外協力隊の派遣等があり、今回、バリ島で視察した二つのプロジェクトでは、専門家の派遣、研修員の受入れ、機材供与が行われている。

それでは、話をもとに戻して、報告を続けることにする。

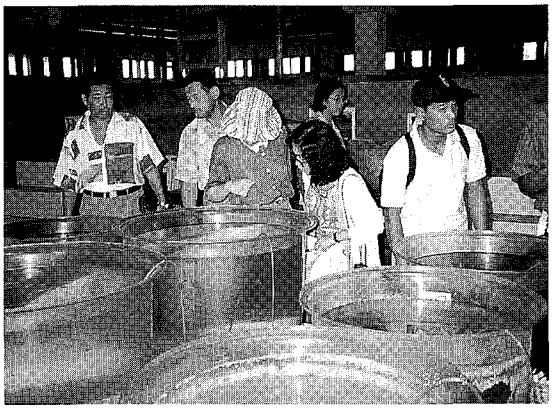
ゴンドール沿岸水産研究所に到着した我々一行は、研究所のスガマ所長さん、プロジェクトチームリーダーの望月さん、業務調整担当の斉藤さん、エビ種苗生産担当の津村さんのお出迎えを受け、会議室でお話を伺った。スガマ所長さんは、高知大学で修士、愛媛連合大学で博士号を取得されているということで、日本語が堪能であるとのことであったが、我々一行の前では緊張されていたのか、あいさつは英語であった。

まず、チームリーダーの望月さんから、プロジェクトの概要について説明を受け、広い敷地の中にある種苗生産施設、病理研究施設などを見学した後、国際協力事業団のこと、プロジェクトのことなどについて研修した。その内容をかいつまんで報告する。

○プロジェクト要請の背景

インドネシアにおける水産養殖分野での国際協力事業団の活動は、一九八五年に、現在のゴンドール沿岸水産研究所の前身として、浅海養殖研究所が設立された時に、インドネシア政府から日本政府に対し、エビ養殖（特に種苗生産）の技術開発について要請を受けたことが発端となり開始された。

インドネシア政府の要請を受け、一九八八年から一九九三年までの五年間「エビ養殖プロジェクト」による技術協力が行われ、その結果、インドネシアにおけるエビ養殖業は飛躍的な発展を遂げた。



種苗生産施設内部

しかし、エビ養殖のみに頼っていたため、流通面での競合や環境の変化に対し、対応が困難であり、また、近年、病気の発生による生産の減少は大きな社会問題となってきた。

一方、インドネシア政府は輸出による外貨獲得源として、また、貧困漁民の所得向上の手段として、水産の振興を国家開発計画の重点施策の一つとしており、エビ養殖で成功を見た養殖産業への期待が高い。

このような状況のもと、養殖産業の安定的発展のため、エビ以外の新たな養殖魚種の開発及びその普及について要請があり、「エビ養殖プロジェクト」に引き続き、この「多種類種苗生産技術開発プロジェクト」が一九九四年から一九九九年までの五年計画で開始された。

○プロジェクトの活動内容

プロジェクトを推進するため、日本から、長期専門家六名のほか、短期専門家延べ十名が派遣されており、その活動内容は、魚類種苗生産、エビ種苗生産、魚病等多岐にわたっている。

魚類種苗生産の対象魚種は、大衆魚のミルクフィッシュ（マグロはえなわの餌にもなる）と高級魚のハタ類である。

ミルクフィッシュについては、種苗生産技術面で飛躍的な向上があり、既に、研究所の周辺で三百軒ほどの小規模の民間ふ化場が操業しており、さら

に、広い地域で民間企業の参入の動きがある。ふ化場の中には、研究所の職員が経営しているものもあり、給料が低いことから、監視をしていないと研究所を抜け出し、ふ化場で商売に励むということである。

ハタ類については、数種の採卵に成功し、商業上最も重要なサラサハタは千匹単位（目標は数万単位）の種苗生産に成功した。このサラサハタの五センチほどの稚魚が水槽の中を泳いでいたが、白い魚体に黒い斑点が水玉模様のように付いており愛嬌のある魚であった。事業団の津村さんは「熱帯魚として販売しても結構いい商売になるかも知れない。」と言われていた。

その他には、ナポレオンフィッシュの種苗生産技術を開発したいとのことであった。日本の水族館でも人気のある魚であり、生産技術が開発されることを期待したい。

また、前述した「エビ種苗生産プロジェクト」に引き続いて、エビの種苗生産技術の研究が行われているが、今回のプロジェクトでは、天然産親エビへの依存を減らすため、「池産親エビの養成技術の開発研究」を主目的としており、既に多くの成果をあげ、現地研究者も充実している。プロジェクト後半には、マングローブ・クラブの種苗生産も検討される予定であるとのこと。日本から派遣された専門家には、必ず現地の研究員（カウンターパートという）が付いて研修し、日本で研修する機会も与えられている。エビの種苗生産技術については協力期間が長く、そのせいもあって、いい人材が育ったのだろう。

次に、養殖業にとって頭を痛める魚病対策がある。インドネシアにおいて、エビの病気による生産量の減少は社会問題にもなったが、ハタからも新種と思われる寄生虫が発見されるなど、今後も新たな病気が発生する可能性が大きい。そのため、インドネシア国内における魚病研究の先駆者的な存在であるゴンドール研究所において、魚病関係の研究者の養成を一層充実させるとともに、将来的には、インドネシア国内に情報のネットワークを構築すべく努力が続けられている。

なお、水産普及員を養成することが本プロジェクトの目的の一つであったが、予算の措置や連携がインドネシア側の事情で進展がなく足踏状況になっている。そのため、国際協力事業団の第二国研修の場として名乗りを上げ、ゴンドール研究所において、普及員のみならず、地方政府の水産担当者、大学や民間の研究者に、種苗生産技術に関する研修を実施すべく検討している。また、ミルクフィッシュの小規模ふ化場の調査と実験的な生産、セミナーや研究論文の出版等の一般的な活動と併せ、プロジェクトの成果を広く啓蒙普及し、インドネシアの養殖産業の発展に寄与することを目標としている。

ミルクフィッシュの養魚池

以上のような活動のほか、種苗生産施設の建設、機材の供与が行われており、また、年平均三名のカウンターパートの日本研修を実施しているとのこと。

派遣されている方々は、「日本では、様々なしがらみの中で研究しているが、ここでは、自分に与えられた仕事に没頭できて、研究者としてはやりがいがある。」と言われていたが、異国の地で生活し、その国のために働くということは、並大抵の努力だけでは困難なことであろう。

パルマビーチホテルでの懇親会

◆バリダンスを踊る

ゴンドール沿岸水産研究所において、二時間余り、国際協力事業団の活動状況について研修した後、我々は、その日の宿泊地のロビナビーチを目指した。一時間ほどで、ロビナビーチに到着。パルマビーチホテルに入った。

このホテルは、敷地内に二名が宿泊できるコテージが南国情緒溢れる花々に囲まれて散在しており、新婚旅行にはもってこいのホテルであったが、男の二人連れでは何とも情けない話であった。

ホテルの裏にはすぐ海が広がっていたが、火山の噴火のためか砂は黒く、水も濁っていた。また、砂浜には、貝殻細工やTシャツを売る子供やおばさんがいて、ホテルの敷地から出て砂浜に出た途端に取り囲まれてしまう。そのしつこさには辟易してしまった（翌日我々は、バリの避暑地キンタマーニ高原でもっと恐ろしい体験をすることになる）。

しかし、売り子さんもホテルの敷地には絶対に入ってこない。これには感心した。

その日の夕食には、ゴンドール研究所のスガマ所長さんご夫婦と国際協力事業団のお世話になった三名の方々を招待し、プールサイドのレストランで懇親会を開催した。

食事は、インドネシア料理のバイキングであった。この料理には旅行中最後まで馴染めず、苦労された方もおられたようだ。また、バリの地酒を飲んでみようということで、椰子の実から作った酒を注文した。この酒がまた何とも言えない珍奇なもので、硫黄臭が鼻を突き、ビンの中で発酵を続けていた。さすがの青年部も大半がギブアップしていたようである。

宴会が盛り上がった頃、バリの民族音楽（ガムラン）の演奏とともに、きらびやかな民族衣装をまとった女性二人がステージに登場し、踊りが始まった。何かの物語を演じているらしいが内容はわからない。そのうち、踊り子がステージから降りて、我々の席に来て踊りに誘った。誘いに乗った人は、ステージで踊り子を相手に見よう見まねで踊りを踊った。我々の踊りは阿波踊りの域を脱しないが、国際協力事業団のメンバーはさすがに慣れたもので、様になっていた。

楽しいひとときを過ごし、懇親会がお開きになった後、砂浜に出て夜空を見上げると、南十字星は発見できなかったが、天の川が輝いていた。久しぶりに見る透き通った星空であった。

◆オプショナルツアーを楽しむ

九月三日早朝、当初の予定にはなかったが、出発までの時間を有効に使おうということになり、イルカウォッチングと市場見学の二手に分かれて、オプショナルツアーを挙行した。

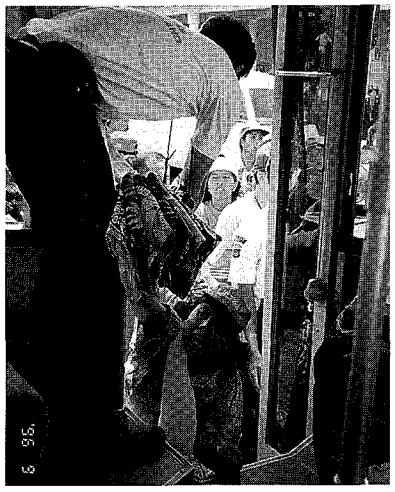
イルカウオッチング

ジンガラジャの市場（魚屋）

イルカウォッチング組は、ホテルの砂浜から四、五人乗りのミズスマシのような小舟に乗って出発、各砂浜からも観光客を乗せた数十隻の小舟がイルカを求めて早朝の海原を水しぶきを上げながら駆け巡った。イルカは、日の出とともにジャンプするそうで、参加者の日頃の精進がよかったのか、めでたくイルカのジャンプが見られたそうである。

市場見学組は、バスに乗り込み、ロビナビーチの東約十キロにある、バリ島北部の町、シンガラジャに向かった。シンガラジャは、オランダ統治時代の一八四八年に、バリの玄関口として築かれた町で、その当時の風情のある建物が今でも町のあちこちに残っている。市場は町の中心部にあり、木造トタン葺き平屋建の薄暗い建物の中に、四百軒ほどの店舗が所狭しと並び、米、豆などの穀物、魚（鮮魚・冷凍魚・干物）、野菜、豚、にわとり、日用雑貨品、衣服、指輪、ネックレスなどの貴金属等々多種多様な品々が販売され、大勢の人々で混雑していた。店員（売り子）、お客さんともに大半が女性であり、我々一行は奇異な目で見られた。バリの女性は働き者である。ただし、市場には、買い物客のタクシー代わりのオートバイが数十台待機しており、その運転手は男性であった。バリ、ジャワでは女性のドライバーは不思議と見なかった。

魚の種類は、マグロ、アジ（全長一メートル位）、イワシ、イカ、アマダイ、ダツ等であったが、冷蔵庫や氷はなく、冷凍品を解凍した魚もあったのか、鮮度は今ひとつであった。さしみを食べない国ではどこでも似たり寄ったりである。市場の中では、魚屋さんのスペースは他と比較すると極端に狭く、バリの原住民には海の魚を食べる習慣がないということであった。海には魔物が棲んでいるという言い伝えがあるらしい。海水浴でも（海水浴という習慣はないらしいが）、腰までしか浸からないということである。



千円おばさん

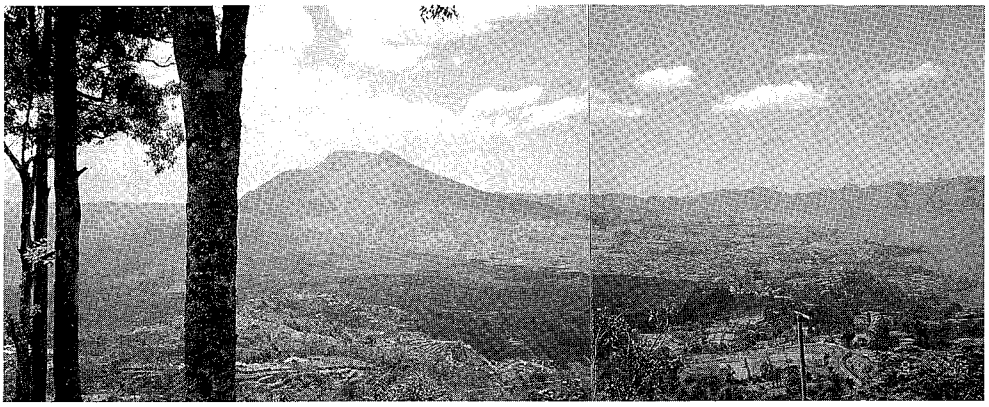
また、商品には価格表示がなく、日本人の観光客もここまでは来ないからか、日本語（日本円）がまったく通用せず、カタコトの英語と身ぶり手ぶりで買い物をせざるを得なかった（バリ・ヒルトンホテルの中では、買物はすべて日本円（硬貨も可）でできし、しかもおつりも日本円で返ってきた。観光地のショッピングセンターなどでは硬貨の使用は無理だが日本円は使用できる。ただ、レートはあまりよくないが）。

なお、金のネックレスを買われる方は、この市場が大変お買い得であることを付け加えておく。

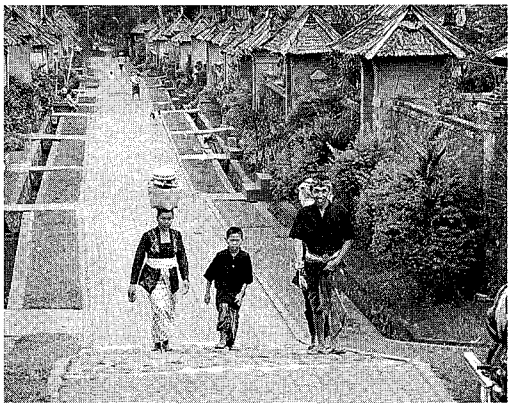
◆バリの避暑地で千円おばさんに出会う

イルカ組も市場組も、ホテルで朝食を食べ、十時にバリ島中北部のキンタマーニ高原を目指しホテルを出発した。市場組が朝訪れたシンガラジャを抜け、しばらく、東に走った後南に向かい、キンタマーニ高原へと続く山道に入って行った。つづら折りの坂道をバスは快調に走り、およそ二時間で高原に到着した。バスを降り、目の前にそびえる活火山バトゥール山（海抜一七一七メートル）や眼下に静かにたたずむバトゥール湖の展望を楽

しもうとした途端、千円おばさんが我々目指して殺到して来た。Tシャツ、キーホルダー、カバンなどを両手に抱え、十枚千円、十個千円と口々に叫びながら、食らいついて来る。歩くことも困難であった。しかし、我々がレストランの敷地に入ると、ロビナビーチと同様に敷地には絶対に入って来ない。敷地の外で叫ぶだけである。ホテルにしろレストランにしろ売り子さんには立ち入れない場所があるようである。



キンタマーニ高原、バトゥール湖



ポンリプラン村

レストランに入り、ようやく風景を楽しむ余裕ができた。バトゥール湖はバトゥール山の噴火によって生まれたカルデラ湖で、バリの水がめである。レストランは外輪山の高台にあり、大パノラマを満喫できた。湖の対岸には、風葬の村があるということで、何となく神秘的な雰囲気が漂っていた。松の木もあり、南国にいることを、一瞬忘れさせてくれる場所であった。

食事を終え、バスに乗り込もうとする我々を待っていたのは、またしても、恐怖の千円おばさん（おじさんも数人混じっていた）の群れであった。その攻勢は一段と激しさを増し、あたふたとバスに駆け込んだ。すると、おばさん達はバスのドアーに殺到し、今にも乗り込んできそうな雰囲気である。ガイドのジャヤさんも困ったような顔をしていたが、おばさん達の生活のためか、外貨獲得のためか沈黙していた。土産の数を揃えたい旅行客には便利であるが、買われた方の話では、粗悪品がかなり混じっていたそうである。皆さん注意しましょう。

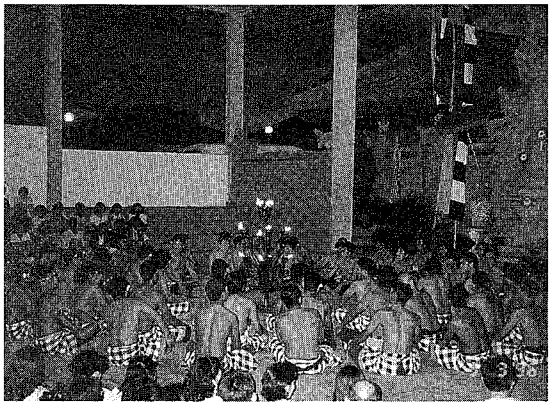
バスはキンタマーニ高原を後にして、椰子の並木道を一時間ほど南に走り、ポンリプラン村という観光村に到着した。この村はバリの伝統的な民家を保存した、住民六百人ほどの村で、バリの人々の暮らしを見学できるようになっていた（家の庭には入れるが、建物の中に入ることはできない）。村のメインストリートは石畳でできており、日本でいう景観保存地区になるのだろうか、静かな美しい村であった。

◆ケチャックダンスを鑑賞する

観光村に別れを告げ、午後五時に宿泊場所のバリ・ヒルトンホテルに到着。休憩した後、デンパサールの郊外にある、ケチャックダンスの行われる舞踊会場に行った。

観覧席は舞台を階段状に取り巻くように設けられていた。ただ、青空天井のため、蚊の襲撃にあった。観客はよくもこんなに集まったと思うぐらいに日本人だらけであった。

舞台にはロウソクが灯され、白と黒のチェック模様の腰巻きを付けた上半身裸の男の集団が、あぐらを組んでその回りを取り囲み、両肩を上下させながらひたすら「チャッ、チャッ、チャッ、チャッ、チャッ、チャッ」と抑揚を付けて叫ぶ（歌う?）のである。その大合唱をバックグランドミュージックにして、民族衣装をまとった踊り子と仮面を付けた男性が、ラマヤナ物語という物語を演じていたはずだが、配られた日本語の解説を読んで理解しようとしてもストーリーの展開が早過ぎ訳が解らない。



ケチャックダンス

ケチャックダンスは、その踊りの意味を理解しようとしないで、南国のみなぎるパワーに感動し、美しい踊り子を見て溜め息をつくだけで十分である。

ケチャックダンスを一時間ほど見学し、ヌサ・ドゥア地区のガレリア・ヌサ・ドゥアというショッピングゾーンにある日本料理店に入った。その日の夕食は、三日ぶりの日本食で、インドネシア料理が口に合わず苦労していた方々も満足されたようであった。

（以下次号へ）

水試 NOTE

マアナゴの資源管理について

マアナゴの資源管理について一つの提案をしたいと思います。

一、マアナゴの生態

産卵期は六月～十二月で、産卵場は黒潮流域の太平洋深海中層と考えられています。産卵後、親はそこで死ぬようです。孵化した幼生はレプトセファルスと呼ばれる透明の葉形をしています。この幼生のことを一部地域ではハナタレなどと呼んでいます。幼生は黒潮に流されながら成長し日本各地に運ばれてきます。このためマアナゴの分布域は広く、函館以南の各地で見られます。大阪湾で幼生が見られるのは、十一月～五月です。水試で幼生を飼育したところ、七月中旬には全長十三㎝に成長しました。その後死亡してしまいましたが、八月～九月には全長二十㎝前後に成長すると推定されます。

二、マアナゴの漁獲動向

兵庫県のマアナゴの漁獲量は千五百トン～二千トンを維持しています(図1)。このように、漁獲量はいくらかの年変動はあるものの、比較的安定しています。このことは、冬から春にかけて瀬戸内海に入り込むレプトセファルス幼生の資源量も比較的安定していることを示唆しています。したがって、今後、漁獲実態や海洋環境に大きな変化がなければ、現在の漁獲レベルは維持できると考えられます。

このような資源を管理という面から考えた場合、資源全体の底上げというより、毎年安定的に加入してくる資源をいかに有効に利用するかを管理目標とする方が現実的といえます。具体的には、価格の低いビリアナゴの漁獲を調整し、収益の増加を図る方策を検討すべきでしょう。

三、マアナゴの価格

価格調査の結果、全長三十㎝を境に単価に大きい開きのあることがわかりました。その価格差は数倍から十倍以上になります。全長三十㎝未満のビリアナゴが多く漁獲され出すのは十月頃からですが、十二月には全長三十㎝に成長すると推定されます。つまり、二～三カ月間ビリアナゴの漁獲を我慢することによって、収益の増加が図れる可能性があります。

四、全長三十㎝以上を選択的に漁獲する方法（全長三十㎝未満を保護する方法）

再放流と網目目合いによる方法の二つが考えられますが、再放流の場合は船上での選別作業が必要ですし、魚が弱る可能性もあります。一方、網目目合いの場合は船上作業は軽減されます。また、魚に対するダメージも少ないと考えられます。水試が行った調査では、網目から抜け出たマアナゴはほとんど生き残ることが明らかになっています。

五、網目目合いとマアナゴ

網目選択調査の方法は幾つかありますが、多く行われているのはカバーネット方式です。これは袋網の外側におおい網をかぶせて試験操業するもので、この試験によって、いろいろな目合いの袋網に対するマアナゴの抜け具合を調べることができます。実際に、板びき網を用いて調査した結果では、十五節の袋網を用いた場合は全長二十九㎝以上のマアナゴが、十四節の袋網では全長三十二㎝以上のマアナゴが漁獲できることがわかりました。この結果から、全長三十㎝未満のマアナゴを確実に保護するためには十四節の袋網を使用する必要があることがわかりました。

六、まとめ

マアナゴの資源管理について一つの提案をしましたが、幾つか留意しなければならない点があります。一つはサイズの問題です。確かに全長三十㎝を境に価格は高くなります。しかし、三十㎝未満のマアナゴにも需要はありますし、流通もあります。この点は考慮する必要があると思います。もう一つは袋網の目合いです。目の大きさは普通、節で呼びます。ところが同じ節でも網地の太さによって目開きが違ってきます。したがって、漁法によって最適な節数が異なってくる可能性があり、もう少しきめの細かい検討が必要です。

（資源部　反田　實）

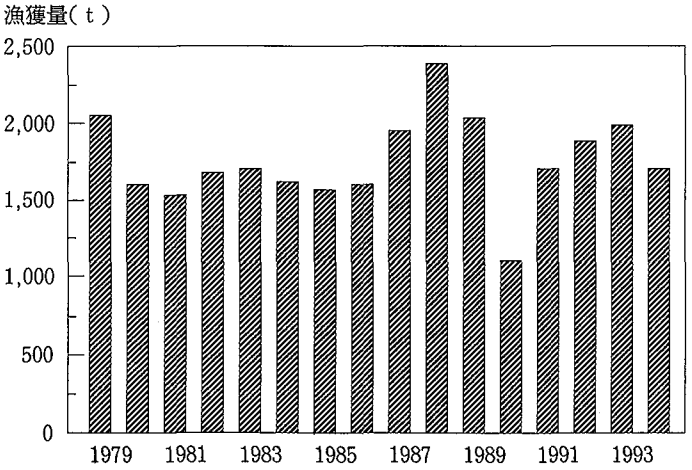


図1　兵庫県（瀬戸内海）マアナゴ漁獲量の経年変化

栽培漁業センターです 98

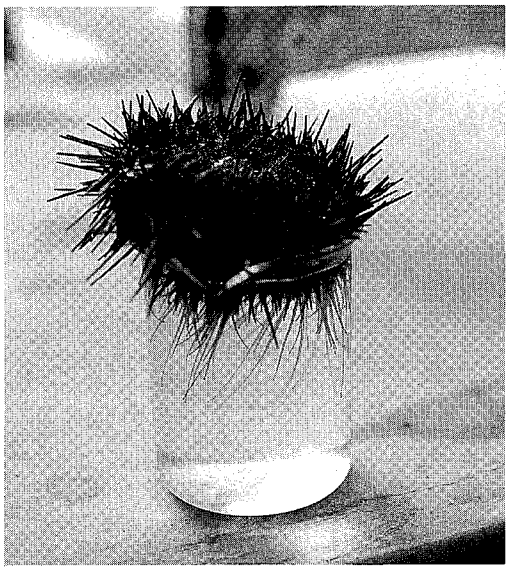
HYOGO PREF MARICULTURE CENTER

協会津名事業場で実施していたクルマエビの種苗生産事業は十月二十二日に最後の配布を終え、全長十四・九ミリから二十五・三ミリの稚エビを合計七百八十八万八千尾生産し事業を終えました。今年度は以前本県のガザミ種苗生産でも大きな問題となった、真菌症というカビの一種が幼生に寄生する疾病で飼育に苦慮し、生産期間は四カ月と長期におよびました。クルマエビについては本疾病に対して有効な対応策はまだ見つかっていませんので、次年度の生産に向けた検討課題として、今後対策を練ることとなっています。

同じく津名事業場で昨年度から生産試験を始めたアサリの種苗生産は、今年度十月十八日に百個体の親貝を使って採卵を行い、計七百九十万粒の受精卵を得ました。ふ化後の浮遊期間中はパブロバという浮遊性の微細藻類を餌料に飼育していて、十月末現在殻長約〇・二ミリに成長しています。また当場では十一月からアカウニやトコブシの種苗生産試験を実施する予定にしています。

一方二見の事業場では十月二十八日から周年養成管理している親ウニを採卵用に使って、アカウニの種苗生産試験を始めました。親ウニは概ね十月から翌三月までの成熟適期に、体腔内に塩化カリウムを注射されるとすぐ放精、放卵を始めますので、写真のように生殖孔を下にビーカーに乗せて個別に管理し採卵します。この方法を使いますと殻径五十ミリ程度の雌一個体で一千万粒近く採卵できることもあります。今回は十三個体の親ウニを使って、反応の良かった雌雄それぞれ三個体から、受精卵四百八十五万粒を採卵できました。得られた受精卵は余分な精子を洗い流す「洗卵」という作業を経て翌日まで管理しますと、卵はふ化し嚢胚期幼生となります。今年度はふ化した嚢胚期幼生の内、百四十万個体を飼育水槽に収容して、浮遊期間中キートセラスという浮遊性微細珪藻を餌料に飼育を行います。順調に成長しますと十一月中旬には採苗できる予定です。

（兵栽協　楽　敦司）



アカウニの採卵状況

ノリの色彩について

秋も日増に深まり、淡路島もいよいよノリ養殖の季節となりました。昨年も、ノリの色落ちにより被害を受けた地域がありましたが、御存知のとおりノリの色彩は、海苔の品質を決める上で重要な要因です。養殖されているノリ葉体は、通常、黒褐の色を呈していますが、一体どのようにしてノリの色彩が決まってくるのでしょうか。

ノリの色彩は、ノリ葉体に含まれている複数の光合成色素によって決まり、特に、緑色のクロロフィルa、赤色のフィコエリスリン、青色のフィコシアニンの3種類の色素によって影響するようです。これらの色素を十分に含んでいると黒褐色になりますが、これらの色素のうち、いずれかが低下すると、花の色と同様にごくまれですがノリの色彩も七変化します。例えば、クロロフィルaが低下すると紫色に、フィコエリスリンが低下すると緑色に、フィコシアニンが低下するとオレンジ色にと様々に変化します。色落ちしたノリも、これらの色素含量が著しく低下することによって引き起こされます。また、これらの色素は、食味に関与する蛋白質とも結合しており、ノリの色彩は加工された海苔の食味にも大きく影響します。

淡路島では、昨年は乾のりの生産量が8億枚を超える豊作でしたが、2月以降色落ちにより西浦を中心に大量の無札のりがでました。今年は、すでに南浦の一部を除いて育苗が済み、水温がこのまま順調に低下すれば東浦と西浦では11月中旬以降に、南浦では12月中旬までに本張りを行うとのことです、これから、いよいよノリの季節が本格化しますが、天候にも恵まれ、病気も発生することなく、色素をたっぷり含んだ質の良いノリが採れればと思います。

洲本農林水産事務所　二羽

漁海況情報

兵庫県立水産試験場
平成８年11月

海況

〈概況〉　播磨灘の水温は、北西部から低下しつつあるが、平年に比べるとやや高い値を示している。塩分は、先月よりも上昇し、平年よりやや高めの値となっている。この高塩分は、昨年十月以降継続している。播磨灘北部沿岸の透明度は、先月よりも上昇し、中部に十ｍ以上の海域がみられる。栄養塩類は、溶存態窒素、リン、珪酸とも平年並か平年よりやや高めの値を示している。しかし、低水温期に増殖し、栄養塩を大量に消費してノリ養殖に被害を与える大型珪藻のコスキノディスカスが、北部沿岸を中心に大発生の兆しを見せており、急速な栄養塩の減少が心配される。今後、水温の低下と十分な栄養塩を背景として、さらに大型珪藻の細胞数が増えると考えられるので、関係者は注意を要する。

〈水温〉　播磨灘表層の十五点平均値は二十一・三～二十一・四℃で、平年よりやや高くなっている。大阪湾及び紀伊水道北部の十月の水温も、平年よりやや高い値であった。

〈プランクトン〉　播磨灘におけるコスキノディスカスの平均出現数は、海水１リットルあたり表層で百三十四、中層で二百二十六、底層で二百二十一細胞である。最も多い加古川河口付近では、六百細胞近く出現している。大型珪藻以外の植物プランクトン出現数は少ない。

〈栄養塩〉　播磨灘表層の溶存態無機窒素濃度は、表層で平年並、中、底層で平年よりやや高めの値、リンは、全層で平年並の値、珪酸は、全層で平年より高めの値を示している。

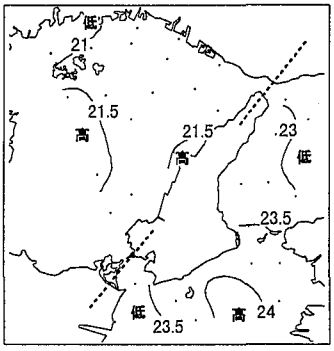
漁況

〈小型底曳網〉　明石海峡周辺を主漁場とする小型底曳網（ちん漕）では、ハリイカ、メイタガレイ、サルエビ、マダイが主に漁獲されているが、量的には少ない。紀伊水道北部では、引き続き小エビ類が漁獲され、その他イボダイ、ハリイカが漁獲されている。

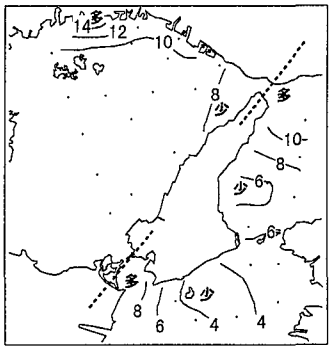
〈一本釣・曳縄釣〉　明石海峡及びその周辺海域では、マルアジ、ハマチ、タチウオ等が漁獲されている。紀伊水道北部では、マアジ、ツバス、タチウオ等が漁獲されている。

〈船曳網〉　しらすの秋漁は引き続き、不調に経過している様である。

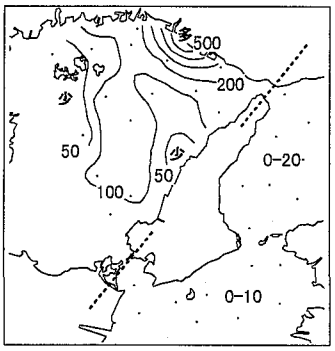
〈カタクチイワシ卵・稚仔〉
　卵は播磨灘の家島、淡路島西浦周辺で少量出現したのみである。



水温（表層水、℃）



窒素濃度（表層水、μgat／ℓ）



大型珪藻細胞数（細胞／ℓ）

水温、窒素濃度および透明度の水平分布（大阪湾および紀伊水道のデータは平成八年十月十五・十六日調査分）

海区漁業調整委員会だより

十月十四日
兵庫県瀬戸内海海区漁業調整委員会委員協議会を兵庫県中央労働センターで開催

一、養殖ノリの新技術開発について
　養殖ノリの品種改良、病害対策等に関する研究の内容及び問題点等について、水産試験場より説明が行われた。

二、漁獲可能量（ＴＡＣ）制度に係る県計画の事前協議について
　漁獲可能量（ＴＡＣ）制度に関する国の基本計画を受けて作成された兵庫県計画の素案及び今後の予定について、県水産課より説明が行われ、その後、委員間で協議を行った。

三、岡山・兵庫県瀬戸内海連合海区漁業調整委員会の平成九年度入会協定について
　平成八年度の入会協定について、事務局より説明を行い、関係地区の委員に対して地元意向のとりまとめを依頼した。

四、第三十一回全国海区漁業調整委員会連合会西日本ブロック会議における提出議題について
　十月二十八日に愛媛県で開催予定の西日本ブロック会議に提出される予定の議題に対する当海区からの回答案について、事務局より説明を行い、その後、委員間で意見交換を行った。

五、その他
　瀬戸内海機船船びき網漁業及び機船船びき網漁業の許可方針の事前協議を十一月に、諮問を十二月に行うことについて、水産課より説明が行われた。

十月十七日
但馬海区漁業調整委員会委員協議会を但馬水産事務所会議室で開催

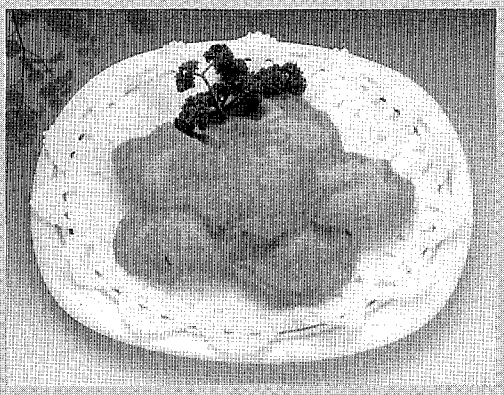
一、漁獲可能量（ＴＡＣ）制度に係る県計画案について（事前協議）
　県庁水産課から当該計画案について説明がなされ、協議の結果、ＴＡＣ制度導入に向けて漁獲量の正確な換算方法について準備をしていく必要がある等の要望が出されるとともに原案が概ね了承された。

二、全漁調連日本海ブロック会議の概要について（報告）
　当該会議の概要について、提案議題をすべて全漁調連に要望することが議決されたこと、水産庁から日韓漁業協定更改交渉の山場には世論の支援要請があった等の報告がなされた。

三、日本海北区六県等の陳情概要について（報告）
　水産課から当該陳情概要について、本県十トン未満船との調整上、三・四月の解禁要望は受け入れられない旨返答したとの報告がなされた。

旬の美味い話 ㊼

菅　晴美



●UFOフィッシュ●

◆材料・分量◆

タチウオ……1匹
玉ねぎ……½個
パセリ……少々
ギョウザの皮……16枚
レモン……1個
サラダ油……適量
（調味料）
酒、醤油、酢、砂糖
……各大さじ1
片栗粉……大さじ2

▼作り方▲

①タチウオを三枚におろし、二㎝ぐらいに切る。

②①の中に、酒、醤油、片栗粉をまぶしカリッとから揚げする。

③ボールの中に酢と砂糖を入れ、あつあつのから揚げを入れからめる。

④玉ねぎはスライスして水でさらす。

⑤ギョウザの皮を一枚ひき、水をまわりにつけ、真中に玉ねぎのスライスをしき、その上にから揚げをおき、もう一枚の皮を上からかぶせひっつける。

⑥百六十℃くらいの油に入れ、ゆっくりカリッと揚げる。

▼おいしく仕上げるコツ▲

強い油で揚げないで、カリカリお煎餅みたいに揚げるのがコツ。

兵庫JCC通信 今、JA・生協では

JA

体験実習の成果実る ～神戸の小学生が稲刈り～

JA兵庫中央会が企画し、進めてきた「JAお米学習教室」では十月十八日、実りの秋を迎え、待望の稲刈りを行いました。

この学習教室は、都会の小学生たちが自然のなかで、自ら稲作を体験し、お米の知識を学びながら、農業への理解を深めてもらうための体験学習です。

学習を進めてきたのは、神戸市灘区の成徳小学校の四、五年生の二百人。稲美町のJA稲美野管内の約二十アールの水田で、この実習を行ってきました。

六月二十一日、雨の中、ずぶ濡れになりながら、みんなで一生懸命に田植えを実施してから、約四カ月。その後の生育や、肥育管理についてはJAと生産者の岩林康男さん（58）らで行ってきました。

待望の稲刈りを迎えたこの日は、あいにくの曇天。それでも小学生たちは、恐る恐る丁寧に、初めて握るかまで稲を刈っていました。たわわに実った黄金色の穂が、ずっしりと垂れ下がる重量感に歓声をあげていました。

この小学生たちが手刈りした稲は、JAで乾燥・調整し、児童たち手づくりの「お米」として、五キロずつ渡し、家庭で試食してもらうことになっています。

この普段では体験できない「お米学習教室」で、子供たちは、農業の大切さ、そして素晴らしさを心に刻んだことでしょう。

自分達で植えた稲をかまで収穫しました。

生協

「地震災害等に対する国民的保障制度を求める」署名運動 全国・兵庫県推進大会を開催

九月二十八日、神戸国際会館ハーバーランドプラザで、「地震災害等に対する国民的保障制度を求める」署名運動「全国・兵庫県推進大会」を開催しました。

兵庫県内の組合員・職員はもとより、全国からの参加を得て、新しい保障制度の実現に向けた全国二千五百万人署名の達成を誓い合うものとなりました。

決意表明をする県漁婦連の糸谷さん

来賓を代表して貝原俊民兵庫県知事が、「将来的に国民が安心して暮らせるしくみづくりが必要、大震災のあったこの地から、充実した新制度の必要性を全国に訴えていきたい」とあいさつしました。

主催者を代表して竹本成徳（日本生協連会長理事／コープこうべ理事長）が、開会宣言を行ったあと、被災記録のビデオ上映、被災地（雲仙・奥尻・阪神淡路）からの報告、尾池和夫氏（京都大学教授／日本学術会議地震学研究連絡委員会委員長）による解説「あなたの町にも地震は起こる」、シンポジウム、全国からの決意表明などがありました。

阪神・淡路大震災を教訓に、地震など自然災害に対する有効で新しい国民的保障制度の実現をめざし、兵庫県、神戸市、全労済協会、日本生協連などが中心となった「自然災害に対する国民的保障制度を求める国民会議」が七月十九日に発足しました。これを受けて八月二日、被災地兵庫県では全国に先駆けて「兵庫県民会議」を発足させました。

この「兵庫県民会議」は、貝原俊民兵庫県知事、笹山幸俊神戸市長をはじめ、兵庫県内の各界各層二十四団体の代表者が世話人となっており、兵庫県協同組合連絡協議会会長（兵庫県漁連・JA兵庫中央会・兵庫県森連・兵庫県生協連）、コープこうべ理事長も含まれています。

11 NOVEMBER
1996年11月10日発行　通巻 481号
昭和32年10月18日　第3種郵便物認可
発行人　兵庫県漁業協同組合連合会
発行所　兵庫県漁業協同組合連合会
(財)兵庫県水産振興基金
〒652 神戸市兵庫区中之島2-2-1　TEL 652-3444　FAX 671-6685　定価80円(本体78円)

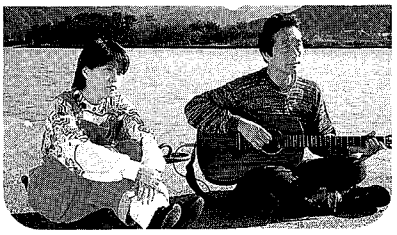
●サンテレビの

こちら海です

田村健太郎君と思わず∨

好青年に成長した瀬渡　守君を真中に

楽しい歌とトークを繰り広げた3人
左からあすか恵美さん、林リポーター、菅原　進さん



津居山港で…

こち海20年!!
思い出のあの歌
あのシーン

～淡路島・但馬各地より～

'96.11月24日放送
（第1000回）

ロケだより

昭和五十二年『こちら海です』は『こちら海です・バラエティ』としてスタートしました。数えて二十年、各テレビ局の中でも最長寿番組の一つとして成長してきました。そして平成八年十一月二十四日放送分でなんと千回を迎えることになりました。これもひとえに番組を支えて下さった皆様、取材にご協力下さった漁業関係の方をはじめとする市町村の皆様のお陰と心より感謝しております。この千回二十年と言う一つの節目を迎え、これからも多彩な番組づくりに取り組んで参りたいと考えております。

そこで十一月二十四日から四週連続『こち海・スペシャル』と題し各局素敵なゲストを迎え二十年を振り返りながらの番組をお送りします。丁度千回の十一月二十四日はトップをきって『思い出のあの歌あのシーン』。ゲストは『ビリーバンバンの菅原進さん』と『演歌歌手のあすか恵美さん』。菅原進さんは現在の『こちら海です』のテーマソング『あなたがいる町』を作詞作曲・平成三年から歌って頂いていますし、あすか恵美さんは、覚えて居られる方もあると思いますが番組のスタートした当初から昭和六十三年までエンディングテーマ『チョチョ節』を歌って頂いていた方で『こちら海です』に関係の深いお二人です。このお二人と共に楽しい『思い出のあの歌とシーン』をたっぷりお送りしたいと思っています。

先ず『あすか恵美』さんと淡路島の南淡町へ。恵美さんは五年前福良の漁師さんでカラオケ日本一になりプロへの誘いもあった亀井新一さんと演歌の共演をして頂いた縁もあります。そして南淡路の漁師さんをオリジナル曲にした『渦潮南淡男意気』と九十一才の今も現役の名物おばあちゃん、沼島汽船の浜本とくゑさんを歌った『はまちどり』を再会の場面で歌って頂きました。それと成長ぶりに感激の再会をしたのが福良の漁師さん一家の田村健太郎くんでした。彼は鯛つり名人として昭和五十七年出演して頂いた田村芳太郎さんのお孫さん。あれから十四年、二十三才の素敵な青年に、そしてお祖父さん・お父さんの後を継いで漁師さんになっていました。九才の時と変わらない笑顔に頼もしさを感じた再会でした。

菅原進さんとご一緒したのは但馬地方。但馬各地でもオリジナルの曲を何曲か作詞・作曲しましたが、今回は津居山の『フィッシャーマンズビレッジ』オープンをお祝いして作った『男度胸の津居山港』と津居山の漁師さんの息子さんで、小さい時から障害にも負けず明るく生きる瀬渡守くんの番組の中のオリジナル曲『まもるのうた』そして香住の余部の鉄橋を歌にした『雪の余部の鉄橋』の三曲の思い出の但馬を取材しました。菅原さんは、自立を目標に頑張り現在豊岡の印刷会社で働く瀬渡守くんの姿に大感激する一コマも。昭和五十七年取材当時守君は九才・二十三才の好青年に成長した彼に私たちの感激も一入のものがありました。菅原さんが心を込めて当時の彼のために作詞・作曲した『まもるのうた』を津居山の港で歌っています。そして余部の鉄橋では感激をそのままギターにのせて即興で演奏。津居山の地元では踊りの振りも出来たと言う『男度胸の津居山港』、恵美さんの歌声に日本海の雄大な海岸を眺めながらリポーターを含む三人は再び二十年後の再会を約束し取材を無事終えたのです。皆様有難うございました。